

小板橋

石上露子集をい
る集11.18者章集
2009.代表正編一
=宮本問谷順光編集者
=顧萬高事務局石照子
=大事務局大田林市
津山台1-18-15
0721-29-1576

講 読

第七回

石上露子 自伝「落葉のくに」

会員 久保満夫

一一八頁～一二五頁 青春の回想

十四歳

母

静かに暮れ残る奥庭のとある石によって木蓮の白つ咲く下でちか子さんや中庸の素読をする私、かつての日のまことの母をおもかげにしてか、ちか子さんへのせめてもの心なぐさめか。(一一九頁)

注

十四歳：今では中学二年のころ、異性への関心が高まる時期、思春期。

大学……修身・齊家・治國・平天下の政治哲学と学問を直結した儒学の精髓

中庸……「誠」と「中」を基本原理とし天人一理を説いた形而上哲学の書

唐詩選……唐詩の選集のベストセラー・百三十人の詩人の作品、四百六十五首を収録

母の詩

母よ！母よ！¹⁾

貴女は 私の心の女王だ

私が苦しみ^{さい}に苛まれるとき

貴女はいつも私を励ましてくれた

どんなことがあっても

貴女だけは私の人生に

いつも光を贈ってくれた

母よ！母よ！

貴女こそ私の心の女王だ



自宅近くのマンション8Fより撮影した金剛・葛城・二上の連山(久保)

1) P・ラムリー(一九九一七三) 映画監督・俳優

参考書
歌手・作曲家(マレーシアの国民的芸術家)

2) 松村緑編『石上露子集』解説・中央公論新社一八三頁・一六八頁・(二〇〇四)

3) 松本和男編『論集石上露子』宮本正章『明星』掲載の露子短歌評訳・中央公論事業出版八二頁(二〇〇二)

4) 大谷渡『菅野スガと石上露子』実母との生別・東方出版 一八六頁～一八八頁(二〇〇二)

文机 十六歳

石川にやなぎの葉の様な若鮎のつれだした五月のとある日、神山薫先生をはじめ迎へる。いままでのどの先生にもないものをこの君はもってお出でになる。お父様も満足らしい。しみじみと教育方針などを話してお出でになる。私もうれしい。 5) 一一九頁

注
私には只一すじのこころをばくまされてゐる。 一一〇頁

神山薫先生……父雪江の三女、露子と正平の關係に運命的なつながりをもつ。露子の自我形成に大きな影響を及ぼした進歩的な女性である。

私の部屋……例の北のはしの四畳半、ちか子さんはそれより南の八畳の上段の間、その間の二畳をあらたに妹の文机と本箱、先生の御居間は新二階とよんで、おじい様曰下よりお見えのときに造られた中二階、南と東にまどのある風雅なたてもの。

家制度……自由な活動は制限・抑圧され、ときには弾圧された。

参考書
5) 松村緑編『石上露子集』解説・中央公論新社・一七三頁・(二〇〇四)

6) 碓田のぼる『不滅の愛の物語』ルック・六三頁～六五頁・一八三頁～一八四頁(二〇〇五)

つきくさ 二十一歳

石川の河原にさざれをふんでちどりの声にほく笑んだあの夜は、もちづきのまどかなかげのもと。相ともに云ひえねば、かたりえねば、其まゝに、まつよびくさのほのかなおもひをのみ胸にひめて。⁷⁾

注
……生きてあらば人もわが身も幸せなるべきに。 一一二頁

石川の河原……大和川の支流でかつては石塊の多い川だった。川魚がゆたかに棲み、夏ともなれば子供らの格好の水遊びの場であった。

つきくさ……ツククサの古名、この花の藍色で布を摺り染めたものは、水に落ちやす

いとところから、「つきくさ」は人の世

のうつろいやすい事のたとえにも使われてきた。

ちどり(写真)……浅瀬でエサをさがす、シロチドリ(チドリ科) 全長約十七cm、胸の黒い帯が中央で切れている。

ピオピオと鳴く。(野鳥と人の生活について、大阪府河川協会二〇〇七)

参考書
7) 松村緑編『石上露子集』解説・中央公論新社・一七五頁～一七六頁(二〇〇四)

8) 石上露子を語る集い編『芝罘一遺稿集』ひたに生きて・一四二頁～一四三頁(二〇〇八)

9) 碓田のぼる『不滅の愛の物語』ルック一九四頁(二〇〇五)

10) 山本健吉編『島崎藤村集』藤村詩集序・集英社・七頁(一九七七)

すががき¹²⁾

人の世はかうも変ると、昔日のうらめしさも忘れて、おすきな道、召使の少女たちに、すががきの一手二手も教へておやりになつたらと進めたりする私。 一二三頁

注

すががき……和琴の手法
11) 文化的伝統と教養・風雅の道
露子は箏や上方舞、手蹟の秀麗さと書技の巧みさの他、薙刀や鎖鎌の修業にまで及んでいる。

参考書
11) 石上露子を語る集い編『芝罘一遺稿集』ひたに生きて・四五頁～四八頁(二〇〇八)

12) 松本和男編『論集石上露子』田井戸克子石上露子の書について

13) 中央公論事業出版・三三八頁～三三九頁(二〇〇二)

14) 大谷渡『菅野スガと石上露子』東方出版・一八四頁～一八六頁(二〇〇二)

日露の役

先生はあの時の私を今も覚えておいでになるか、よし覚えておいでになつても、それは愛国婦人会の幹事として、地主の子としてみではないだろうか。そんな事さへ淋しさが添ふ。いやなこと、きらいなかげもいまはなべてなつかしい。 一二五頁

15) みいくさにこよひ誰が死ぬさびしみと髪ふく風の行方見まもる (一九〇四)

みいくさに在るはかしこしさはいへど別れし君ぞわれの泣かるる (一九〇五)

参考書
14) 石上露子を語る集い編『芝罘一遺稿集』ひたに生きて・八七頁～八八頁(二〇〇八)

15) 松本和男編『論集石上露子』中央公論事業出版・一〇〇頁～一〇三頁(二〇〇二)

16) 松村緑編『石上露子集』中央公論新社一七六頁(二〇〇四)

露子の平和への願いの一考察

夢李白 其一

死別已吞聲 生別常惻惻

江南瘴癘地 逐客無消息

故人入我夢 明我長相憶

恐非平生魂 路遠不可測

魂來楓林青 魂返關塞黑¹⁷⁾

詩心を培った要因

山と河のある南河内地域の地理的状况

母との生別、実らぬ恋など悲劇的な青年時代

神山先生の教育

家制度と長女としての責任感

明治の時代的思潮

河内野の白菊にたとえられた露子は、ちよつとハイカラで、芯の強い明治の女性であつたが、そのロマンスは結ばれなかった。しかし、悲劇や挫折感を乗り越えて、夢と希望をもった人間愛(ヒューマニティ)があり、詩心の底辺には平和を願う露子がいたと考察する。

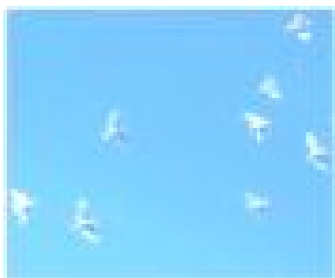
参考書
17) 田中克己他『中国古典文学大系十七』杜甫『平凡社』三三六頁～三三六頁(一九八七)

18) 牧口常三郎『人生地理学』文芸堂書店一六〇頁～二〇五頁(一九〇八)(復刻)

19) 松本和男個人編輯『石上露子研究』河内野の白菊・明文社・三三八頁(一九九六)

20) 大谷渡『菅野スガと石上露子』自我のめざめと苦悩・東方出版一九六頁(二〇〇二)

21) 松原市郷土研究室編『松原市の史蹟』七頁～五三頁(一九六二)



名作逍遥 (北原 白秋篇) 二・三

山内三千雄

嘆けとていまはた白僧園の夕の鐘もなりいでにけむ

春愁の一首だろつ。

作者がまだ、早稲田の英文科に入学当時とするには遠いが、あの辺りには二回住んでいた様です。

緑に蔽われた目白台の僧園辺りで鳴り出す夕べの鐘の音は路ゆく若い自分に、恰も嘆けと言わんばかりに情味深く鳴りいでたと言うのである。

僧園とは寺院のある所。

憧れをもつ若い日である、この鐘の音がエルサレムからでも響いてくる様にも思われたに違いない。

一首を美しく、清らかに貫いているリズムは心の底から湧き出る溜め息の懐かしさを持っている。

「いまはた」と鳴り出でた鐘の音は、結句「なりいでにけむ」という余韻を、夕べの空に遠く霞み入るかになるまで響かしている。愛誦する一首でもある。

わが世さびし身丈おなじき茴香も薄黄に花の咲きそめにけり

歌集「桐の花」(薄明の時)所収。

初夏である。茴香の畑に出てみる。

茴香も、身の丈は自分と同じ程でありながら、早や花を咲かせ始めている。

初句に主観の動い言葉を据えているが、こつ詠いたかったのも、全ての事が哀れをそそり、感情が溢れ、茴香にも劣る身のさびしさが、いたく顧みられたのであろう。あわれである。

茴香とは薬草の一種で、香辛料としても人の生活に近く親しみ込まれている花でもある。

かく、初句は動い主観で打ちだしたために、以下は努めて写実的に詠い、懐かしい心を内包させながら、余韻を持たせて収めている。円錐形詠法とも言うべきでしょうか。

「身丈おなじき」甚だ潤いをもたせた句である。

懐かしみやら、動く主観性も出しながら、南欧の官能的な花の香りにも魅かれて、生みだされたのかも知れないとまで想像を駆らしめる。

こつ詠い味わいのある歌に出逢つと、常に渴き勝ちである自身の心が顧みられてくる。

僅か一本の草花にも他人事ならぬ愛着の起きる愛しさこそは欲しいものと思われる。

この歌の力点は全て此処に集中されているよう。敏感な神経と、独自の嗜好性が示されているのである。

小板橋短歌会

(芝罘一氏)

第二基の露子の歌碑の建立を祝ひて師の遺志天にかがやく

村上悦也

死地目ざし南へ洋上五百キロ二時間半に何を思ひし

加藤賢一

おとずる人なき深山の高貴寺を好みし子息との墓碑の慎まし

高石志奈枝

嵐過ぎ露子の歌碑を建立す鎮守の森に朗詠こだます

田口勝代

葛城山のやまぎわ仄と明るみて淡く始むる河内野のあさ

右手和子

台風の去りてひんやり湿りたる落葉ふみゆく高貴寺への坂

黒島和子

朝毎に行方さえぎる女郎蜘蛛女帝の如く上座で眺む

勝間さと子

山寺のつゆ子愛せしこのみ寺今日命日の歌碑の幕ひく

芝てる子

初霜の落ち葉に降りるこの夜ごろいま再びの学びはじめむ

久保満夫

秋雨の古杉あらう高貴寺に石上露子の歌碑いまたちぬ

奥野令子

小板橋だより

会報小板橋の発行

十二月号・一月号合併号とします。

一月小板橋短歌会への詠草と新年のご挨拶は十二月末までに事務局まで。

一、石上露子文学アルバム五十冊 東京都 松本 和男様

一、金 五仟円也 豊中市 岡田 政豊様

一、金 参萬円也 東京都 河澄恵美子様

一、金 参萬円也 西宮市 勝間さと子様

右の通り御芳志を拝受いたしました。

紙上を以って厚く御礼を申し上げます。

例会予定のお知らせ

十二月

石上露子没後五十年記念事業慰労会

日時 十二月十三日(日)

午前十一時三十分

送迎バス 集合場所 近鉄南大阪線

富田林駅西口タリ 十時五十分発

喜志駅西口タリ 十一時発

現地 十一時三十分

会場 梅酒家(〇七二)九五五 一一〇四

会費 五〇〇円(一部会負担)

問合せ 〇九〇 二二八一 九二二七 大石

〇七二 一三三 四一六四 田口



梅酒家

最寄り駅 近鉄南大阪線 道明寺駅 徒歩約4分 道明寺天満宮前

一月例会

日時 一月十七日(日)午後一時より

場所 富田林市立中央公民館(予定)

テーマ

落葉のくに 講読

講師 奥村 和子氏

助言 宮本 正章氏

司会進行 萬谷 順一氏

小板橋短歌会詠草の合評

助言 高石志奈枝氏

例会には石上露子集(中央文庫)必携のこと

小板橋短歌会への詠草は毎月末までに一人一首事務局まで

宮本正章著『石上露子百歌』

松本和男編著『石上露子文学アルバム』

富田林市旧杉山家住宅(重要文化財)に展示してあります。手にとってご覧いただくことができます。

問合せ先 〇九〇 二二八一 九二二七 事務局 大石